

常なる磐

つねなる いわ season II

令和3年8月6日(金)

◇ 一◆入魂 その②

【2020 東京五輪】も、残すところあと3日となった。

日本人選手の頑張る姿から、多くの人々が勇気をもらったことだろう。

8月5日(大会13日目)現在、センターポールに日の丸が掲揚されたのは、実に22回。獲得総メダル数と併せ、歴代最多を大幅に更新中である。表彰式で国歌に合わせて日の丸が揚がる度に、背筋が伸び、身が引き締まるのは、自分だけではなからう。



意外であったのは、君が代を歌う若手の選手が多いことだ。中でも体操・種目別鉄棒で金メダル表彰を受けた直後の橋本大輝選手の姿とコメントには心を動かされた。

『マスクを着けていたので、よく分からなかったかもしれませんが、君が代を精一杯歌いました』と、さらりと言ったのけた。【一唱入魂】といったところか。

微笑みを浮かべながら爽やかに語る19歳の青年のコメントに、国を背負いながら戦い抜いた強い意志がはっきりと汲み取れる。国旗・国歌には全く興味をもたぬと思っていた若者世代。だからこそ発言がとても新鮮で、清々しく思えた。

コロナ禍の自粛で、昨年から今年にかけて君が代を歌った機会は卒業式のみ。聞き慣れぬ音楽に一年生は「ぽかん」としていたが、2年生以上の児童はしっかり歌えていた。身に沁みついているということ。さらに児童の視線の先、前方斜め上には国旗が懸かる。五輪の表彰式に近いシュチュエーション。

国旗・国歌論争をする意思など全く以って無いが、学校現場では、国歌を歌うことも、国旗を掲揚することも稀ではなく、普通にある。この普通にあること、普通の経験が、時に大きな意味をもつ。センターポールに日の丸が揚がるのを見る度に身が引き締まるのも、積み重ねた経験があればこそ。

さて、国歌をバックに日の丸が掲揚される映像を通して子供たちは何を思い、感じたのだろうか。新学期が始まったとき、問うてみたいものだ。